VVI Newsletter 2024　New Year Issue

Happy New Year, Everyone！みなさん、新年明けましておめでとうございます。

どのようなお正月をお迎えになりましたでしょうか？

今年初めのNewsletterをお届けします。内容は、今年、VVIのリーダーが交替しました。

新任のお二人からのメッセージがあります。また、昨年１０月に開かれた第66回CWAJ現代版画展の

Hand-on Artについて、実際に体験された方の感想を含めてご報告いたします。

更に、ご自身視覚障害者として、障害者の教育・就業環境の向上に、長く、大きな貢献をして来られ

指田忠司（さしだ ちゅうじ）さんのお話を掲載しています。どうぞごゆっくり、じっくりお読みください。

**＜目次＞**

1. 新任VVI Co-chairからのメッセージ　：　Nancy Tsurumaki / 中瀬 恵里
2. 第６６回版画展Hands-on Artのご報告　:　半田 こづえ (HoA Coordinator)
3. 指田忠司さんにうかがう ： 英語との関わり、そして、世界への扉
4. 編集後記

＜ここから記事がはじまります＞

1. **新任VVI Co-chair** からのメッセージ

\*Nancy Tsurumaki（ナンシー・ツルマキ）さん　（ご本人からは英語でいただきました。まず初めに、編集担当の和訳の後、オリジナルの英語も掲載しています）

皆さんこんにちは。私の名前はナンシー・ツルマキです。中瀬恵里さんとVVIの新しいCo-chair（委員長）になりました。エディターからご依頼があり、自己紹介をさせていただきます。

アメリカニューヨーク州の小さな町で育ちました。こんな私が、結婚して、東京に移って、そこで半生を暮らすことになるとは、誰が想像できたでしょう⁉私だってできませんでした。

大学で看護学を学んだ後２年間仕事をしていましたが、平和部隊のボランティアでホンジュラスに行き、そこで、ジャイカで仕事をしていた日本人の夫に出会ったのです。結婚後日本に帰国して、二人の子供が生まれました。学校の看護師として何年か働いていましたが、引退した後CWAJに参加して、VVIで活動しています。現在、JVDCB（日本視覚障害者職能開発センター）で英会話を教えたり、筑波大学附属視覚特別支援学校で、生徒を対象とするプログラムにも参加しています。

日本に暮らして40年余り。あっという間に感じていますが、今年、中瀬恵里さんといっしょにCo-chairを担当することになって、とてもうれしく思います。VVI活動でいろいろなイベントを計画したいと思っていますので、皆さんから、どんなことをやりたいか、是非知らせていただきたいと思います。対面でのECG（英会話の集い）も始まっていて、映画鑑賞や版画展でのHoA（ハンズ・オン・アート）も開かれました。何か、こんなことやったら楽しいかな？と思うことがあったら、是非お知らせくださいね。これからZoomでも、対面でも、皆さんにお会いできることを楽しみにしています。

<以下、オリジナルの英語のメッセージです。

Hello! everyone. My name is Nancy Tsurumaki. Eri Nakase and I are the new co-chairs of VVI. Ms. Ishii asked us to give a short introduction about ourselves.

When I was growing up in my small village in New York State, who would have thought that I would marry, move to Tokyo, and live here for the rest of my adult life? Not me! I graduated from university with a nursing degree, worked for 2 years, and then became a Peace Corps volunteer in Honduras. I met my Japanese husband there, who was working with JICA. We married, moved back to Japan and had two children. After working as a school nurse for a number of years, I retired, joined CWAJ, and became involved in VVI’s programs. I have been a volunteer English teacher at the JVDCB (Japan Vocational Development Center for the Blind and Low Vision) and working with the student programs at Special Needs Education School for the Visually Impaired)

 So, after living in Japan for the past 40 plus years, time has seemed to fly by, and this year I am lucky to be working with Eri Nakase. As we plan out our events for VVI for the coming year, please let us know what you would be interested in doing. We started to have our in-person ECGs again, at movie theater, plus our Hands on Art event at the Print Show, but if can suggest any other events or places that you would enjoy, please let us know. I look forward to meeting everyone in person or on Zoom. 　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　Nancy Tsurumaki

＊次は中瀬恵里さんのご挨拶です。

＜ご挨拶：VVI委員長就任にあたって＞　　　　　　　　中瀬 恵里（なかせ えり）

皆さんこんにちは。２０２４年１月から、VVI(Volunteers for the Visually Impaired：視覚障害者との交流の会）のCo-Chair（委員長）をさせていただくことになりました、中瀬恵里と申します。私自身は全盲の視覚障害者で、CWAJ視覚障害学生奨学金（国内）の元奨学生です。

もう一人のCo-ChairであるNancy TsurumakiさんやCWAJの他のメンバーとも協力して、VVIの活動がスムーズに進むよう、また視覚に障害のある皆さんに喜んでいただけるような活動ができるよう、取り組んでいきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

**２．第６６回版画展Hands-on Artのご報告　　　　　 半田 こづえ (ハンズ・オン・アート担当)**

　　第６６回CWAJ現代版画展は、秋の爽やかな気候に恵まれた１０月１８日（水）～２２日（日）に代官山ヒルサイドテラスにおいて開催されました。今年は、初の試みとして、東京都現代美術館の教育担当学芸員である鳥居茜さんのご協力を得て、触図の選定から作成まで、視覚障害者と晴眼者がともに楽しむことができるものを、と考えました。テーマや技法が異なる４点の作品を選び、これまでの立体コピーに代わり、カラーの図版の上に触図が印刷できる、"EasyTactix"という技術を用いて作成しました。視覚障害者と一口に言っても見え方は一人ひとり違いますが、色のある触図を楽しんでくださったlow visionの方もおられました。また、ボランティアのガイドが一方的に版画を説明するのではなく、同じ作品を観たり触ったりしながら、会話を交わす様子が見られ、新しい楽しみ方が開かれてきたように感じました。

　そして、今年は、版画に親しむ方法の一つとして、版画の様々な道具や素材などで構成された「触察ツール」を用いたワークショップを開催しました。この「触察ツール」は、東京都現代美術館で開発されたもので、版画の様々な技法を触って理解することができるツールです。１０月２１日（土）に開催されたワークショップでは、鳥居茜さんのナビゲートの下、参加者が触図に触れたり、触察ツールを用いて版画がどのように制作されるのかを体験したり、実際に展示されている作品の前に立って、版画がどのように見えるのかを語り合ったりして、鑑賞を深めました。

　思いがけない嬉しい出来事は、ワークショップで《Have a nice day》という作品を鑑賞していたちょうどその時に、作家のサイトウ　ノリ子さんがたまたま会場に来られ、ワークショップに飛び入り参加をしてくださったことでした。サイトウさんは、参加者の様々な質問に楽しそうに答えてくださり、最後に硬い銅の板に実際に線を引いて、その音を聞かせてくださいました。一同その力強い音に驚き、作品ができるまでの工程に思いを馳せました。沢山の発見があり、笑い声の絶えないひと時となりました。

　今年は、２０名の視覚障害者がボランティアのエスコートで版画を楽しみました。また、美しい触図に引かれて沢山の来場者が「ハンズ・オン・アート」のコーナーで足を止め、作品に触れて楽しんでくださいました。CWAJ現代版画展が誰もが楽しめる展覧会であることを、これからも大切にして行きたいと思います。

以下に、来場者から寄せられたコメントを掲載します。

＊会場にうかがってのハンズ・オン・アート参加は数年ぶりだったのですが、秋晴れの午後、本当に楽しいひとときを過ごさせていただきました。今回はボランティアの方と1対1で待ち合わせができたことで自分の都合の良い時間を選ぶことができ、また立体コピーに触るまでの待ち時間なく、自分のペースで楽しく対話をしながら作品を味わえたのがとても有難かったです。立体コピーにしていただいていた作品4点も、形がはっきりした分かりやすいものでありながらも、抽象的な物と具体的な物のどちらも選択いただいていたので、とてもバランスが良いのではと感じました。

また、ガイドしてくださった三宅さんも、私が触っている間解説しすぎず、作品の理解においてポイントとなる

形状などについては適宜補足しつつも、作品全体を理解していくのを待っていてくださったので有難かったです。　　（女性）

＊先日は、スタッフの皆様のおかげで、楽しく充実した時間を過ごすことができました。本当にありがとうございます。時間を区切って、個別に対応していただけたことで、より深く、多角的に作品を感じることができました。

また、触図に色があったことで、どの部分にどんな色がついているか、触りながら説明していただくことができました。自分が何の前情報もなく、触った雰囲気から思い描いた色遣いと、ずいぶんちがった感じで、そのギャップを楽しんだり、頭の中でイメージを修正してみたりすることで、一つの作品を２度、３度と味わった気分でした。　（男性）

\*10/20(金)午後、ハンズ・オン・アートの来場の際には、サポート＆支援をして頂きまして、本当にありがとうございました。広瀬隆士さんの作品【Peaceful Sky】では、イスラエルとパレスチナによる紛争激化、ロシアによるウクライナへの侵攻長期化と暗いニュースが続く中、こんな時勢だからこそ、作者の世界平和への熱い思いを感じる作品で、心打たれました。今回のように、日程を選択でき、サポーターさんとコンタクトが出来る企画に感謝しています。 （男性）

\*この度はハンズ・オン・アートオンに行かせていただきありがとうございました。ワークショップにも参加いたしまして、とても楽しかったです。行き帰りなどご一緒いただいた下田様にも良くしていただき、懐かしいCWAJの話などもできました。とても安心でした。立体コピーもわかりやすかったです。また来年も行けたらいいと思っています。　　（女性）

**３．****＜インタビュー：指田忠司さんにうかがう：英語との関わり、そして、世界への扉＞**

　　＜ご紹介＞

指田忠司（さしだ ちゅうじ）さんは、世界盲人連合（WBU）アジア太平洋地域協議会の元会長で、日本と海外の視覚障害者の就業状況を調査され、その向上に幅広く長く尽力されています。その活動の基盤としての英語は、若い頃からの興味から努力を重ねられ、海外での交流や調査にも大きな武器となっていることに注目されます。ご自身だけでなく多くの視覚障害をお持ちの皆さんの国際交流発展にも大きな貢献をされてきています。指田さんは23年秋に、毎日新聞社主催の「第60回点字毎日文化賞」を受賞されました。そこで、英語をどのように勉強されてきたのか、そして視覚障害の方々の状況把握のためにどのように海外との関わりを築いてこられたのか、いろいろお話をうかがいました。

**＜英語との出会い、係わり＞**

２歳年上の姉がいましてね、小学校のころから、なにかあるといろいろ教えてくれていました。中学に入ったら

おもしろい先生がいて、英語についての興味が格段にあがりました。1年生 のときの先生は、かつて進駐軍で

通訳をしていたという方で、当時の教材を提供してくれたり、2年の時はクリスマの歌を英語で教えてくれた

りして、授業がおもしろかったです。ちょうど1966年に英検の４級試験が始まって、先生の勧めでチャレンジしてみたら、みごと合格！３年生の時には３級に受かりました。当時、たまたま手にした本があったんですが、それは英国にあるRugby Schoolの歴史（註アリ）についての本でね。小さい字で大変だったけど、がんばって少しずつ読んだりしました。

（註）Rugby School：16世紀にイギリスで創立されたプブリック・スクールで、13歳から18歳の生徒が

　　　寄宿生活をしながら学ぶ名門校。オックスフォード大学やケンブリッジ大学に進学する生徒が多いこと

　　　でも知られる）　（註ここまで）

高校に入ってすぐにケガをしてしまって、１年半入院生活を送りましたが、見えていた右目が見えなくなって

しまいましたから、点字を習うことになりました。週一回病室に来てくれる看護学校の学生さんにお願いして、

その年ノーベル文学賞を受賞した川端康成の受賞記念講演を書き取ったりして、けっこう役に立ちました。

これは日本語だけでなく、英語の点字も習得する機会になりました。英語点字は当然必要になると思ってい

ましたから。更に英語の略字も覚えました。実は入院中、となりのベッドに居た方が、ドイツ語翻訳家でした。

話をしているうちに、ドイツ語にも興味がわいて、その方からいろいろドイツやドイツ語について教えてもらって。

実はこのことが、のちの私の研究活動に大きな影響をもたらしました。

その後盲学校に移ったのですが、ここでは、みんなが点字を読みとるスピードの速さにびっくりしました。

アメリカ人の女の先生による英語会話の授業があって、これはとっても楽しかったです。当時の英語テキストには様々な註が書かれていて、これが全部英語だったので、とても気になっていました。そこで、３年生の夏休

みに一念発起して、この英語の註の解釈にチャレンジしました。１年から３年までのテキストに書かれている註を、全部、辞書を引きながら訳しました！これがすごく勉強になりましたね！

**＜高校から大学へ＞**

進学を考えたとき、受験科目の多い大学は無理と考えていましたから、１年浪人することにしました。予備校に行って英語だけ履修したんですけど、とってもおもしろい先生に出会いました。独学で高等文官試験（現在の上級公務員試験）を受けて資格をとった、というその先生。東北なまりの英語でしたが、特に英文解釈に重点を置いて、ひとつの問題に何通りもの答えを示してくれる、というやり方で、話がおもしろいしやる気が出たし、ほんとうに勉強になったと思います。

1974年に早稲田大学法学部に入学しました。当時はまだ障害のある者への門戸は狭かったですよ。

前の年に国立大学として初めて東京大学で障害学生の受験がオープンになったばかりでした。早稲田でも

全日制では私が初めてで、高校の先生からは「後輩のためにも良い成績をとれよ！」と激励されて受験。

責任重大でした。そして入学の際には、大学に特別な要求をしないように、という内容の「誓約書」を書かさ

れて！実はのちに私はこの誓約を破ったんですけどね・・・！

高校時代にも英会話のクラスがあって会話にはけっこう慣れていましたけど、なんとか続けたいと思って、

そのころ交流のあったCWAJの方に、ネイティブのメンバーを紹介してもらいました。それがDiana Harries

(ダイアナ・ハリス)さんで、お宅にうかがってQueen‘s Englishを教えてもらいました。このお宅には当時の

アメリカ大使も来られたことがあるという立派な邸宅で、あらゆる意味でほんとうに貴重な経験ができました。

ここで私が話したかったテーマは、障害者の問題でしたから、内容はDianaさん経由で、VBS（現在のVVI）

を創設された御手洗道子（みたらい みちこ）さんに伝わって、CWAJの奨学金制度に視覚障害者への奨学金を加えようという検討が始まったと聞いています。

　１９７５年夏、友人と６人で、文部大臣（現・文部科学大臣）に陳情書を送ったことがありました。それは、

視覚障害学生を受け入れる勉学環境、教育の機会の改善についてでしたが、ご自身の御父上が障害を

持っておられた当時の永井大臣が関心を示されて、直接大臣室で話をする機会をいただきました。その

結果として、障害者の教育に関する助成金の増額が決定し、その後、国立・私立共に大学が障害のある

学生への門戸を開いてくるようになりました。

このいきさつなどを、英会話を習っていたDianaさんに報告していましたが、関連の資料を英訳して渡し

たこともあって、CWAJの視覚障害学生への奨学金制度の創設が決定しました。Scholarship for the

Visually Impairedです。視覚障害学生への給付式の奨学金は当時日本には全くありませんでしたから、

日本で初めての制度です。ただ、最初は受給対象がしぼられていて狭く、条件も限られていましたので、

私自身は受けていないんです！

**＜生涯をかけた仕事＞**

　私はかねてから、外国に於ける視覚障害者の状況、特に雇用状況や支援制度について知りたいと思っ

ていました。それで、CWAJの御手洗（ミタライ）さんにお願いして、質問したい内容を英語で書いていただ

いて、アメリカに送りました。またイギリスにも、Dianaさんを通して送り、ドイツに居る知人にも、更に「フラン

スに行くことになったよ」と連絡してきた友人に早速頼んで、結局４か国の状況の調査ができました。

そして1990年に、トヨタ財団のご支援をいただいて、実際に出向いて調査をする機会ができたのです。

これには、CWAJのVirginia 岡村（バージニア・オカムラ）さんの、ロス・アンジェルス在住のお嬢さんを巻き込んで、ひとかたならぬご協力をいただきました。まずアメリカ西海岸から国内各地をまわり、イギリス、ドイツに

渡りました。イギリスはRoyal National Institute for the Blind（RNIB）の協力と、ドイツでは、かねてから親交の

あった大学教授からご紹介いただいて、現場での調査をすることができました。

１９９１年８月半ば、アメリカ国内数か所をまわった後、イギリスに向かうべく準備していた時、「ソ連でクー

デター発生」のニュース！アンケート調査を発送しようとしていた時で一瞬迷いましたが、ともかく「行くしか

ない！」と、思い切って出発！結局、イギリス、ドイツ共に、調査は無事に完了しました。この１年半前ベル

リンの壁は崩壊していましたが、おみやげとして元ソ連兵の使っていた「冬用の帽子」を売っていて！興味

本位で買って帰りましたところ、かみさんに「やめてよっ！」と一括され?あとは「ベルリンの壁のかけら」でしたが、あるテープ雑誌の読者プレゼントに提供しました。

そのころ私は、どうも視覚障害の学生など若者が、あまり海外に出て行っていないように感じて、気になっていました。ちょうどCWAJのVBSのメンバーから、視覚障害のみなさんと交流する機会をつくりたいのだけれど、というご相談があって、若者が集まって英語に触れられるような会はどうか、と提案してみました。そこで始まったのがＥCG（English Conversation Gathering）というプログラム。誰でも参加できる、学校ではやらないような内容で、英語に関心のある若者達がけっこう参加するようになったんです。私自身最近はあまり参加していませんが、楽しいプログラムが続いているのは喜ばしいことです。

**＜近況＞**

『点字毎日』（週刊点字新聞で２０２２年に創刊１００年を迎えている）への月２回の連載は、もう30年もやっていますが、視覚障害者の置かれる状況や、差別撤廃への動きなど、各国の状況を研究しながら、海外の視覚障害者の状況を日本の皆さんに伝えたいという考えで続けています。最近では、SNSなどで個別の情報は入ってきますが、俯瞰的（ふかんてき）に見る必要があると思っています。また技術の進歩や制度の変化の激しい時代、世代や国境を越えて共通の理解をすることが、障害者だけでなく社会全体で難しくなっているこの時代に、リアリティをもった情報の共有が必須と考えています。

今回の受賞については、私の活動を認めていただいたことを感謝しつつ、今後もしっかり続けるように、という激励ととらえて、これからも発信を続けていきたいと考えています。

以上

＜編集担当＞　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　石井ふみ子　（編集担当）

皆さん、どのような新年をお過ごしでしょうか？

世界各国で起きている争い。同じ国の中であったり、民族間の闘争など、ほんとうに心の痛むニュースばかりです。私たちは、なにかできるのでしょうか？悩むばかりです。

今年は、なんとか、罪のない人々が、無用の血と涙をながさないで済むように祈ります。今のところ

できるのはそれだけです。

皆さん、今年もお元気で、それぞれのお仕事、活動をお楽しみになりますよう願っています。そして、興味のあるVVIの活動がみつかったら、是非ご参加ください。お待ちしています。

そして、新しいCo-chairsも呼びかけていますように、こんなことが知りたい、こんなことを楽しみたい、というご提案、ご意見を、お待ちしています。

この一年が、皆さんにとって穏やかで、楽しい年となりますようお祈りしております。

石井ふみ子　（編集担当）

本村　理子　（配信担当）